社会学はなぜワンダーなのか

―― 最終講義シラバス ――

今日は私の最終講義にお越しいただき、ありがとうございます。

いま紹介されたように私は、駒場で 34 年教えました。今日この会場にいらっしゃるのは私の講義やゼミに出ていた人たち、私の同僚、様々な場面で私を助け支えてくれた人たちばかりです。本当にお世話になりました。皆さまのお力添えなしには今の私もありませんし、今の相関社会科学もないと言えます。心から御礼を申し上げます。

34 年と一言で言っても、それなりに長いものです。マートンはコロンビアで 32 年、パーソンズはハーバードで 47 年。マートンにちょっと勝てて、よかったです。

最終講義って何を話せばよいのだろう？と少し前から考えていました。その時に、バーガーの Accidental Sociologist という本のことを思い出しました。

この本は大長老先生の自伝です。が、そこで相当辛口なことを書いています。「今の社会学には退屈（bore）とおしゃべり（narrative）が跋扈している」。そんなにひどいことを言わなくてもいいのに…。そこで、私は「社会学はワンダーなんだ」ということをこの場でお話ししたいと思います。

（1）

自伝風にお話しましょう。私が高校生だった 60 年代後半は熱い時代で、学園紛争やら親子対立が最高潮でした。私は親の影響力の外に出たいと思っていて、その時に見田先生が新聞に書かれたコラムをたまたま読んで、「私には社会学しかない！」といきなり決めたのです。

そういう意味で私も Accidental Sociologist です。しかし大学に入って社会学の授業を 2 回聞いて、社会学に失恋をして、勉強を止めました。

代わりに私が学部と大学院で勉強したのは哲学だけです。当時華々しかったフランス現代哲学の本を原書で多数読みました。メルロー＝ポンティからドゥルーズまで。本郷で私の指導教官であった高橋徹先生には、いつも「お前は社会学じゃない」と言われ続けて、これも落ち込むわけですが、まあその通りです。

その高橋先生は、たぶん私の将来のことを心配されていたのでしょう。私は学部生の時に結婚していましたが、その相手の山本真鳥は人類学で、博士課程に進学してフィールドワークに出ることになったのです。フィールドはサモアという南太平洋の島でした。高橋先生は「お前は真鳥さんについて行け。サモアに行け」と強引に言うのです。「哲学青年みたいな青臭いことをしていては飯が食えんぞ」ということだったのでしょう。

はい、私はついて行きました。これは私が新聞研の助手になった 20 歳後半のころで、ハワイやサモアを何回も往復して、かれこれ 2 年はサモア人をやっていました。1980 年の前後です。養子になり、壁のない家で波の音を聞きながら暮らし、イモやバナナを食べ、日が暮れたら寝るという生活をしました。

そこから立ち上がったのが、サモアの儀礼交換の研究です。サモアの儀礼交換はモースの『贈与論』にも出てくるほど「本場もの」なんです。

この研究は本の形になるのに、17 年かかりました。この本の最後の言葉、「サモア人の理性に曇りはないが壁がある。すべての人と同じように」と書いて完成したのは 1996 年 1 月 9 日の明け方でした。その時には空が崩れるのではないかと思うほどの衝撃が走ったのを覚えています。

この研究は上野千鶴子さんが、「日本発で初めて世界に通用する経済人類学の業績」と評価してくれました。

が、この研究に 17 年かけられたということに驚くべきでしょう。今の若い人たちは業績に追われていますから、こんなにのんびり研究を熟成させるなんて許されません。

社会学が、退屈とおしゃべりになっていくのにはそれなりの理由があるのです。

（2）

サモアについては私たちの研究はまだまとめらないままでしたが、90 年から

カリフォルニア大学のバークレー校に 2 年間行かせてもらいました。フルブライト奨学金です。

在外研究している暇な間にサモアの研究をまとめることを勧めた人もいましたが、私は嫌いです。

大学にはほとんど行かず、サンフランシスコのサモア人のコミュニティで、ソーシャルワーカーの仕事をしました。

アメリカには、日本の市役所や区役所にある福祉事務所なんてありません。自分たちで自分たちの仲間のために活動する NPO のようなものがあるだけです。福祉住宅（低所得者住宅）の世話から、職業訓練、交通事故の後始末、暴力沙汰の調停、麻薬販売で捕まった若者の罪を裁判所で軽減してくれるように嘆願するなど何でもします。

バークレーの先生が「そんな危ないところに行ってはいけない」と忠告してくれるような場所でしたが、それまでに見たことも想像したこともない生活がありました。かつてホッブスは、「自然状態」において人生は「孤独で、貧しく、卑劣で、残酷で、そして短い」と書きましたが、そんなものです。家に帰って一人になると泣き叫び、朝まで考えるということをしました。

「そのような活動が社会学と何の関係があるのか？」とお思いの方もいらっしゃるでしょう。社会学の研究をしにカリフォルニアに行っていたというよりは、現地のスラムで泥の中に住み、泥を食べ、泥を排泄していただけです。

でも、泥の中に住み、泥を食べ、泥を排泄することなしに、社会学の研究などは出来ないのです。

当時時々ロスのサモア人コミュニティにも足を運んでいました。そこで親しく付き合っていたサモア人の実業家がいて、いつも私を黒塗りのキャデラックに乗せてくれました。事業に成功し、アメリカで最初の、サモア人のロータリークラブ会員となった人です。いつも自慢話ばかりをしていました。ところが、私がサンフランに帰るということで飛行場まで送ってくれた時のことです。夜の高速道路を運転しながら、突然こう言うのです。「ヤスシ、アメリカにはお金を稼ぐことしかないのだよ」。一番成功したサモア人がこんなことを言うなんて！

こういう真実を聞き出してこそ、社会学の研究というものだと思います。

ありきたりの質問票を配って集計すれば、業績になるなんてことはありません。

（3）

三つ目として、相関社会科学の「地域調査」のことをお話しします。

これは学生たちと現地に足を運んで、現地の人たちの話を真摯に聞くという趣旨で始めたものです。東大を卒業して、官庁なり企業でエリートとして活躍するだろう人たちが、日本の disadvantaged な人たちのことを知らなくてよいわけはないという想いで続けてきました。いくつもの過疎の町や村に通いましたし、1995 年の阪神淡路大震災の後には被災者やボランティアの大掛かりな聞き取り調査もしました。

90 年代には過疎は遅れた地域の問題だと考えられていましたが、私たちは「これは日本の未来だ」と言って、地域の人たちを励まし？ました。

これと並行して、川崎や荒川で在日朝鮮韓国人の研究もしましたし、留学生の調査もしました。隅田川の堤防で暮らしている人たちとも深い？付き合いをさせていただきました。

そのなかで私もたくさんのことを学びました。

****

社会学はなぜワンダーなのか？

一言で言うと、人間が人間と真正面に向き合う営みだからです。

社会学は傍観者のように社会と付き合うということはできません。そんなことをしては、退屈かおしゃべりになります。

人間が人間と真正面に向き合ってもお金が儲かるということもないし、名誉を得られることもないでしょう。「私は頭がよい」なんていうことをみせびらかすようなものでもないです。

人間が人間と真正面に向き合う。楽なことではありません。そんなシンドイことをしなくても生活できるからこそ、社会は成り立っているのです。

でも、これが社会学のミッションです。だからこそ、社会学はワンダーなんです。

儀礼としての経済

サモア社会の贈与・権力・セクシュアリティ

山本　泰
山本真鳥

**サモアの儀礼交換のフィールドワークを
とおして、社会理論の最先端を切り拓く!**

「社会が経済になってしまった」われわれの文明、「経済が社会である」サモアの社会。
反対の社会の経済、権力、性などから見える
われわれが当たり前に生きているものの不思議。

弘文堂　　定価（本体5631円＋税）